

No.92

平成 25 年 1月 30 日 公益社団法人日本山岳会富山支部

【年頭のご挨拶】

公益社団法人日本山岳会富山支部 支部長 山田信明

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。 年末年始は悪天候の日が多く、全国で山岳遭難事故があいついで発生したのは残念なことでした。

さて、日本山岳会は昨年4月1日に公益社団法人としてスタートしました。 富山支部でも支部規約をあらため、前年度導入した支部会費も活用して支部 活動の活性化を図ってきました。会員の皆様のご協力で概ね順調に行事や山 行を実施することができました。

今年は富山支部創立 65 周年の年に当たります。これまで 50 周年、60 周年 と大きな記念事業を実施してきましたが、今回は大掛かりな計画はないものの公益活動の点からいくつかのことを考えております (支部通信 No.5 参照)。



・「山の日」講演会と播隆祭

播隆上人顕彰碑の建立から今年で30年。「山の日」制定協議会が提唱する6月第一日曜日を播隆祭の日と決め、碑前祭および高頭山記念登山を例年以上に幅広く一般に呼びかけて実施します。また前日には講演会並びに前夜祭を播隆ネットワークや5支部にも呼びかけて開催します。

自然保護全国集会の共催

日本山岳会自然保護委員会から平成25年度の全国集会を立山で開催したいとの意向をうけ、その詳細について決定次第富山支部としても全面的に支援したいと思います。

・海外も含めた記念山行、その他

以上 65 周年記念事業について支部会員のご意見をお寄せください。また、これを機会に、従来から支部の問題点でもあります新入会員の確保と、支部山行・例会への積極的な参加を切にお願いするものです。

あと2点について報告いたします。1つ目は「板倉勝宣・松尾峠遭難90周年」の案内です。大正12年1月、槇有恒・三田幸夫とともに立山で暴風雪に会い、松尾峠付近で26歳の若さで亡くなった板倉勝宣の遭難から90年に当たる今年、芦峅寺において記念の行事が行われます(「山」1月号参照、富山支部も共催)。もう1点は「日本三百名山登山ガイド全3巻」出版事業計画です。山と渓谷社から2000年頃に出版された同名の本を、各支部が分担取材・執筆して日本山岳会版としてリメイクされるものです。どちらも詳細はまたご連絡いたしますので、支部会員のご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後に皆様のご健康とご活躍を祈念するとともに、支部会報がより魅力あふれる会報となるよう活発な寄稿をお願いして年頭の挨拶といたします。

新春雑感

還暦になってから、スキーと山登りなど山に関する総ての行動の日記をつけていたので正月の暇つぶしに数えてみたら、22年間で1230日、年間60日ほど登ったり滑ったりキノコを採ったりしていたことになる。その間に登った山は約500山、大半は県内の里山で、中でも最も数多く登っていたのは高落場山(1122m)である。高落場山は国道304号線城端トンネルの真上にある山で、今から約五百年前、赤尾の道宗といわれた妙好人が月に一度井波の瑞泉寺へ参るのに歩いた『道宗道』の一部でもある。

若杉部落跡からの登山道は、その昔城端から唐木峠、朴峠をへて五箇山への重要な生活道路で、牛馬も通らせるため敷かれた石畳状の石がその名残を残している。唐木峠辺りまではコナラ、クヌギ、リョウブ、マンサクなどの雑木で、峠を越えるとミズナラ、ブナなどの自然林となってくる。

この山は四季を通じて楽しめる。 $2\sim4$ 月の積雪期はトンネル横からシールをつけて3 時間弱で頂上へ着くことができ、白山方面の連山に目を遊ばせ、帰路はブナ林の大斜面を夫婦滝へ滑り込むのはまさに快適である。 $5\sim6$ 月は新緑萌えるブナ林を雪椿の花を愛でながら稜線を歩く軽登山は子供連れでも安心である。

この山が真価を発揮するのは秋である。ブナやミズナラの落ち葉が登山道を埋め、その静かな山に秋の足音をカサコソ、カサコソと響かせ登ってゆく道脇には、ツルリンドウの赤い実が迎えてくれる。この辺りから木の上部に眼を走らせながら登るのがコツである。10 月中頃からムキタケ、ヒラタケ、クリタケ、ブナハリタケ、ナラタケが出始める。ブナの大木の上の枝股にヤマブシタケが顔を見せることもあるが高くて採れない。時としてシイタケ、エノキタケも眼に入ることもある。

11 月から 12 月にかけては本命のナメコが出始める。 $5\sim6$ 年前各地の山のナラ、コナラに「カシノナガキクイムシ」が発生し立ち枯れした木が多く、その木に丁度昨年頃からナメコ菌がつきだし、立ち木にナメコが付いている。本来はブナ、ナラ、クリなどの $3\sim4$ 年経った倒木に生えるのだが、こんな立ち木に出るのは珍らしい。どこの山でもナラ、ミズナラの立ち枯れ木があれば、ここ $3\sim4$ 年はナメコの大漁が出来そうである。

キノコ採りは毒茸もあるので判らないキノコは採らないことである。またこの季節は「スズメバチ」の活動期でもあるので、もし遭遇したら決して手で追っ払わず直ぐ逃げることである。

キノコ採りは実に楽しい。採ったキノコでのキノコウドンは最高に美味である。 (近藤 晋 記)

10 月例会山行 朝日岳~栂海新道

【月 日】 平成24年10月8日(祝)~10日(水)

【参加者】 山田信明(CL) 本郷潤一(SL) 金尾誠一 山岸和子 渋谷 茂

【コースタイム】記録:金尾誠一

10/8 木戸自工 6:50----北又小屋 9:20----イブリ山 13:30----朝日小屋 15:50

10/9 朝日小屋 6:00----朝日岳 7:00----吹上のコル 7:40----長栂山 8:40----アヤメ平 9:25----黒岩平 10:50----黒岩山 11:30----文子の池 12:30----サワガニ山 13:40----犬ケ岳 15:35----栂海山荘 15:50

10/10 栂海山荘 6:00----黄蓮山 7:10----菊石山 8:00----下駒ケ岳 8:45----白鳥山 10:10----シキワリ 11:30----坂田峠 12:20----尻高山 13:30----入道山 14:40----親不知観光ホテル 15:45----日本海 16:00----木戸自工 18:50 栂池から三度目の挑戦で念願の栂海新道を歩いた。26 年前の夏であった。白鳥山の「頂上に着くと二人とも全く無言でじっと苦痛に耐える。吐き気がして水さえ受けつけない。」(1999年『愛山記』渋谷 茂著)と書いている。

もう一度歩いてみたかった。栂海新道は、北アルプス最北端、朝日岳の吹上のコルから日本海の親不知まで続く、距離にして 27km の長大な縦走路である。小野 健氏が 1971 年、10 年の歳月をかけて、山岳会の仲間と共に登山道を開通させた。約30 年近い年月の経過は記憶を風化させ、初挑戦に近いものだった。

10月9日

私は朝日小屋の小屋締めの手伝いで、10月7日から入山し、皆さんを待って10月9日早朝6時、朝霧の漂うなか朝日小屋を後にする。ひんやりとした空気に、これからの道程を思うと身が引き締まる思いがする。約1時間で朝日岳山頂に着く。眺望は得られず、剱岳や雪倉岳、白馬岳、清水尾根の姿も雲に包まれている。頂上付近で雷鳥の雄と出会った。2011年の調査で朝日岳に棲む雷鳥は、44羽(2012年『ライチョウ生息環境調査報告書』冨山県)確認されている。西條好廸氏は『大蓮華山・朝日岳』(大蓮華保勝会発行)のなかで、「日本海型気候の影響を受けて、局所的にはハイマツ低木林が標高2,100mにまで下降しているのが朝日岳一帯の特徴」であると書かれているが、「低標高」に暮らす朝日岳の雷鳥は特異な存在でもある。

まだ、たっぷりと残る雪を横目に、構造土の砂礫の登山道を吹上のコルまで下る。花の季節にはミヤマアズマギク、ウルップソウ、タカネシオガマなど蛇紋岩の台地に高山植物が咲き乱れる。吹上のコルは蓮華温泉と栂海新道の分岐点である。左下の朝日池の周囲は、ミネカエデやナナカマドなどの黄葉、紅葉が朝日を受けて見事な装いである。

いよいよ栂海新道へと向かう。オオシラビソの低木林を抜けると、視界が開けて照葉の池に出る。池の縁には、真紅の絨毯を敷き詰めたようにチングルマが色づき、周辺には絶妙なナナカマドの赤、草紅葉、見事な色合いである。今年最後のドラマを演じきる自然の妙技には絶句する。ワインカラーのクロマメノキの葉の色具合もなかなか良い。紅葉を存分に楽しみながら、秋の陽光を一杯に受けて長栂山に着く。黒部川や黒

部市、入善町、日本海が一望できる。長栂山(2,267m)から黒岩山(1,624m)までは、600m 以上の標高差がある。谷間の景色も満喫しながら、オオシラビソや踊りカンバの異名がある奇妙な形のダケカンバやムスカリ、ミネカエデなどの色づく林を潜り抜けて、ぬかるむ湿原のなかの滑りやすい道を進めばアヤメ平である。イネ科のヌマガヤだろうか、茶褐色一色の草原のなかを歩く。霧が深くなり、周囲の景観を包み込んでしまって寂寥感を募らせる。アヤメ平から黒岩平までは、岩の多い道や湿原のなかを下っていく。見通せないこともあってなかなか遠く感じる道程である。



黒岩山山頂を目指す

黒岩平の標識がある場所まで約1時間25分かかった。記憶の糸を辿るが、記憶の中にある「画像」とは似ても似つかない地形が広がる。むろん訪れた季節は異なる。「アヤメやニッコウキスゲが所々に咲いているが、まだ残雪が残っていて山の夏はもう少し先のようである」と『愛山記』には書いている。その一年前に、台風の影響で豪雨のなかを中俣新道にエスケープした当時のことを思い出す。黒岩平は軽快な沢音が聞こえる広大な湿原である。花の時期には、リュウキンカ、ミズバショウ、ハクサンコザクラなどが咲き競う、さぞ素晴らしい今生の楽園が出現することであろう。奥山に広がる平原を清冽な清水が縦横に流れる。とにかくミズバショウの葉の大きいこと。前方に小高い黒岩山が見えてきた。中俣新道の分岐から木の階段を登れば、黒岩山山頂である。流れる霧の間から時々展望も得られるようになる。黒岩山から一気に下る登山道が見え、目指す犬ケ岳へと続く山塊が、時折霧の間から手招きする。

黒岩岳の山頂には、赤銅色のミヤマホツツジ、橙色に染まるイタヤカエデ、常緑のシャクナゲの林縁には、 黒赤色のミヤマシグレなど、自然の神々が創りたもうた美が疲れを癒してくれる。朝日小屋の愛情一杯!の おにぎりをほおばると、ずっしりとした充実感が身体中を駆け巡った。

急な坂道を降りて、振り返れば黒岩山が赤黄の「紅葉の帽子」をかぶったように見える。やがて、微風に 池面が小刻みに波打つ「文子の池」に着く。午後 0 時 30 分。登山道脇にはオヤマリンドウが名残りの青色 の花をたくさん咲かせている。植物の種類の移り変わりに、標高を落としたことが感じられる緩やかな稜線 歩きが続く。まだ緑葉のハウチワカエデ、ひときわ赤く染めあげたヤマウルシ、特にミズナラの小喬木が目 立つ。急登を登りきれば、サワガニ山である。右手に明星山も白い岩壁を見せつける。犬ケ岳へと連なる嶺 が前方に展開し、栂海山荘も捉えられる。ここからが気が抜けない痩せ尾根の登山道で、いくつかの小ピー クを越えていかねばならない。針葉樹のキタゴョウマツなどの矮小低木が狭い稜線の登山道を支えている。 装いを凝らしたミヤマホツツジ、オオバスノキ、マルバマンサクなどが行く手を飾り、稜線から数百メート ルも、ほぼ垂直に切れ落ちた谷底には、雪渓がまだ分厚く残っている。かなりの高度感である。

登り坂手前に「北又の水」の看板がある。栂海山荘までの最後の水場である。涸沢を 5 分ぐらい降りれば、豊富な水が得られる。甘く軟らかな味は、山神の恵みである。用意してきたペットボトルにつめる。まだ登らねばならないのに、味にひかれて多めに担ぎ上げる。「途中の雪渓で米袋いっぱい雪を詰め込んで犬ケ岳

を登る」(『愛山記』)と書いているが、この付近の雪渓だったのだろうか。急な登山道を登らねばならないが、登りきると台形の犬ケ岳が至近距離になり、弱い秋の陽光を浴びて鈍く輝いている。黒部の奥山を見せ付けられているような、いや、先鋭で凝縮された黒部の山々よりも、もっと重畳たる巨大なスケールの山々や、深く切れ込んだ峡谷がダイナミックに展開する。その堂々たる威風には圧倒され、押しつぶされそうな気分さえ覚える。アップダウンを繰り返しながら犬ケ岳(1,593m)に到着した。午後3時35分、弱々しい陽光が注ぐ。見え隠れする道程を振り返りながら感慨に浸る。



犬ケ岳山頂

大ケ岳から少し稜線を辿って下ると栂海山荘がある。緑と赤に塗られた大きな山荘で広い幕営地や、ヘリポートもある。山荘の中に入ると、長い一日が終わった実感が湧いてきた。休憩を含めて約 10 時間の道程であった。1 本の缶ビールをみんなで分け合って乾杯し、労をねぎらう。今晩の夕食は、ジンギスカンにシャケ、ラーメンの豪華な献立である。おまけにウイスキー付である。ほとんどの食料を背負ってくれた仲間に感謝である。甘い肉の味わい、足指の末端までも染み入る暖かい温もりは、酒のせいばかりでもあるまい。良寛を語り、宮沢賢治を語り、山を語る、こんなにも至福な一時があるだろうか。外に出ると、我が愛する朝日岳や連なる雪倉岳、雨飾山などの峰々が、ゆっくりと夜の帳に沈み込んでいく。

10月10日

昨日同様、長丁場になる今日一日、朝 6 時にお世話になった部屋を清掃して山荘を出る。風が冷たく感じる。山荘が朝日を受けて火照る。白鳥山が遥か、遥か彼方に聳える。犬ケ岳から菊石山までは、標高差で 400m 近く下る。ダケカンバやブナのなかの道で、振り返れば犬ケ岳が見える。左手には、堂々たる風貌の初雪山の山容が見え隠れし、そよぐ風もない穏やかな秋の気配が優しく山々を包む。一面ブナのみの極相林は圧巻である。朝日がブナの樹木に降り注ぎ、灰白色の樹肌が一層白く輝き存在を際立たせる。「黄蓮の水」を通過して、



黄蓮山のブナ林

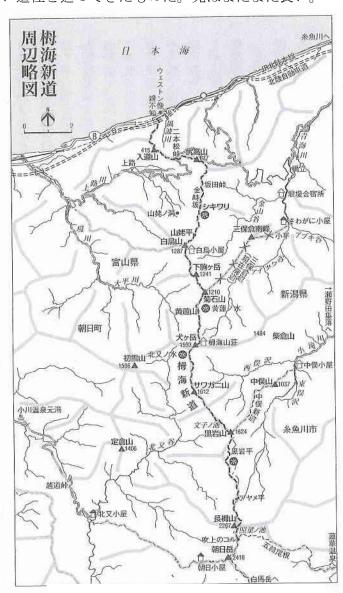
菊の花型のアンモナイトの化石が発見されたことからその名がある菊石山 1,210m に到着する。午前 8 時である。ここから一旦下ると、今度は固定ロープを頼っての岩場の激しい登りが待っている。あえぎながら登っていくと、前が開けてくるのを感じ下駒ケ岳山頂である。

下駒ケ岳は約 190 年間絵図に示されていたが、国土地理院の地図から山名が消え、そののち国土地理院に働きかけて、平成 14 年に 2 万 5 千分の一の地図に 135 年ぶりに明記された峰である(不明瞭な案内板に書かれてある)。樹木越しに白鳥山が見えるが、まだまだ先である。崩壊地の痩せ尾根を歩き、樹木の間を何度かアップダウンを繰り返しながら、残り約 200m の登りである。さすがにきつい。二階建ての白鳥山荘がある白鳥山に到着した。朝日岳が霞んで見える。長い道程を辿ってきたものだ。先はまだまだ長い。

白鳥山から緩やかな稜線の登山道を進み、谷に下るとシキワリの水場に着いた。水が勢いよく流れている。この谷は、初夏にはシラネアオイが群生しているし、特に白鳥山頂上付近のカタクリは素晴らしい。再び登り、金時ノ頭を過ぎると、激烈なとも言うべき 300m ほどの下り坂が待っている。金時坂である。体重が足一杯にかかり苦痛に誰もが無言になる。やっとのことで山姥(やまんば)林道、坂田峠に出た(午後0時20分)。

坂田峠の名は上路の山姥伝説に由来すると案内板に書かれてある。およそ 600 年前の室町時代、能楽の祖の世阿弥の謡曲「山姥」に「上路之山」の記述があり、山姥は坂田の金時こと金太郎の母親とも伝えられる。かって上杉謙信の時代に掘られていたとされる橋立金山は、景気のいい頃には 1,000 人もの人が住んでいたとのこと。明治 30 年代には、朝日町泊の芸子さんが人力車で峠を越えて通い、芸者街道とも呼ばれ往時の面影を残す。峠には、地蔵様が一体鎮座している。心和む穏やかな表情である。昼食のパンをほおばる。清涼飲料水よりも生水がやたらおいしい。もう投げ出したいくらいの気分だったが、腹に食べ物を入れたら力が湧いてきた。

いよいよ親不知までの最後の詰めである。所要時間およそ約3時間半はみておこう。ここから尻高山までは、穏やかな登山道で、菊石山のブナ林ほどの



小野 健著「栂海新道を拓く」より

巨木の数は少ないものの、山はブナの木が林立する。このまま穏やかな道を辿って、親不知まで行けたらどんなにもいいだろうと、弱音が支配的になってしまう。尻高山山頂にも愛嬌のある表情の地蔵様が鎮座し勇気づけてくれる。木を切るチェンソーの音が聞こえ、畑が見えてきた。人の生活臭は寂しさを癒す。終点が見えてきたようである。杉の巨木やホウノキなどの樹木が目立つ。右手には黒姫山が見え隠れする。鉄梯子を使って舗装した堀割林道に降り、栂海新道の看板に導かれて再び樹林帯に突入する。杉林の里山を黙々と歩いて行き、上路集落に通ずる二本松峠から入道山への登りである。これがなかなか手ごわい。登りきれば赤字で「入道山」の看板が立てられてある。終着点まではあと一時間ぐらいであろうか。日本海が見え隠れするが、樹林帯の中をひたすら下るのみ。午後3時を過ぎてくると林のなかの登山道は薄暗く感じる。友人

に「小石が滑りやすいよ。最後で疲れきっているからいやになるぞ。」と教えてもらったが、その通り。疲れ切った足が小石で滑り、転びそうになる。国道が見えてきた。ようやく長い長い山旅は終わり、親不知観光ホテル前に降りきった。

日本海の打ち寄せ引く波音が大きく聞こえる。ホテルから日本海まで階段を下り7分、登り10分。山と海、すべての営みは連続しているのだ。三日間とも晴。幸運とも言うべき天気に恵まれた。26年前の栂海新道の記憶は、さらに色濃く更新された。これで二度と行くまいと思ったが、ふと、黒岩平の花々が咲き乱れる山上の別天地の光景を思った。 (渋谷 茂 記)

(山の標高は、三省堂『コンサイス日本山名辞典 修訂版』を参照した。)

第28回全国支部懇談会(千葉支部)

平成24年10月20日(土)~21日(日)

今年の全国支部懇談会は創立 5 周年を迎えた千葉支部の主管で、房総半島の里山里海を会場に開催された。全国 23 支部から 180 名あまりが参加、富山支部からは山田 (JR)・金尾(自家用車)の 2 名のみの参加だった。東京駅前を出発した高速バスは 1 時間半あまりで太平洋に面した国民宿舎「サンライズ九十九里」に到着。受付後に金尾氏と合流、開会までにすぐそばの「智恵子抄碑」や九十九里浜の潮騒を訪ねる。県立中央博物館副館長の記念講演「房総の自然と里山里海」を聴いたあと地元九十九里町の郷土芸能公演があった。懇親会は堂本前千葉県知事(JAC 評議員)の乾杯で始まり、途中全員でビンゴゲームを楽しみ、吉永副会長(千葉支部)の挨拶でお開きとなった。

2 日目の早朝、日の出前に金尾車で二人宿を出る。海岸沿いの有料道路を走り片貝海水浴場に車を寄せる。 波荒い砂浜の向こうには沢山のサーファーがもう海に入っている。やがて朝霧の中に大きな太陽が昇ってき



た。日の出時刻は 5:52。片貝漁港近くの竹久夢二詩碑や一等三角点(千葉県で最も低い)を探し、続いて伊能忠敬出生の地(公園)を訪ねた後、急いで宿にもどり、朝食バイキングに滑り込む。今日の山グループは笠森観音ハイキングコース、海グループは九十九里浜散策コースへ。金尾氏は今日中に伊能忠敬記念館(佐原市)を訪ねるため送迎バスには乗らず、先に車で笹森観音へ直行する別行動をとる。

宿からバスで1時間の野見金公園からハイキングをスタート。私は1班で岩尾リーダーを先頭に本部役員、京都支部長、四国支部長らと一緒にトップで出発。展望台に登り、これか

ら歩く房総半島の分水嶺である約 5km のハイキングコースについて説明を受ける。顕著なピークもなく 里山が遠くまで続いている。8年前に閉鎖された「ユートピア笠森」の敷地を横切って山道に入る。照葉 樹林や杉木立で展望はきかないが強い日差しが遮られて快適だ。ラクダの背のような小さなアップダウン が多く、ピークにはたいてい巻き道もあった。終始速いベースで歩き、10 時半にふたたび展望台に登る と笠森観音の屋根がすぐ近くに望めた。笠森観音(天台宗笠森寺)に一番乗りして重要文化財に指定され ている観音堂に参拝。境内で配られた昼食弁当をいただきながら後続のパーティを待った。

宿にもどり東京駅行きのバス2台を見送ってからJR組の4名を大網駅まで車で送っていただいた。千葉支部のスタッフの皆さんには大変お世話になり、どうもありがとうございました。

7:36 宿 \sim 8:37 野見金公園 \sim 8:44 展望台 \sim 9:10 観湖台 \sim 10:15 木落 \sim 10:32 展望台 \sim 10:43 笠森観音 \sim 12:30 笠森駐車場 (山田信明 記)

荒島岳 1,524m-第 51 回全日本登山体育大会福井大会-

平成24年10月27日(土)~29日(月)

日本山岳協会主催の全日本登山体育大会が福井岳連の主管で開催された。そのテーマは『白山開山の祖「泰澄大師」祈りと歴史を辿る山々』で、県内6つの山に登山コースが設けられた。富山県からは15名が参加、富山支部会員は次の5人だった。Bコース(荒島岳): 永山義春、本郷潤一、山田信明、山岸和子、Eコース(野坂岳): 菅田静子

初日は福井県県民ホール「アオッサ」8階で開会式が行われ、席上福井岳連名誉会長宮本数男氏(前福井支部長)が神崎日山協会長から特別表彰を受賞。引き続く講演会では重廣恒夫氏「ヒマラヤから日本の山へ」、

増永迪男氏「福井の山の見どころ、良いところ」のお話を聴いた。多彩なステージショーを楽しんだ夕食交流会も閉会となり、福井駅そばのビジネスホテルに宿泊した。

翌朝まだ暗いうちにホテルを出ると昨日と打って変わって 今にも降り出しそうな空。アオッサ前から出る送迎バスに乗 り込み、渡された朝食弁当をいただく。5時半過ぎに出発し、 大野市街でトイレ休憩したあと荒島岳を前方にながめている うちバスは中出コースの登山口駐車場に到着した。「日本百名 山」取材のため深田久弥夫妻がこの山に登った時は宮本さん が案内役を務めたとのこと。



荒島岳山頂にて

全員カッパを着込んで出発する。最初は杉林の中で展望はきかない。雨は本降りではないが、稜線に上がると風が強まる。小荒島岳のピークではちゃんと立てないくらいの強風で、荒島岳の頂は雨雲に隠され始めた。しゃくなげ平に9時50分到着。依然風が強く雨も加わる。リーダーの判断で登頂希望組26名とスタッフが1.5km先の荒島岳に向かい、他はここから勝原登山口に下ることになった。急な登りの登山道には階段や鎖がついている。やせ尾根も予想に反して風が弱まって難なく通過できた。山頂では一等三角点と奥の院の社が迎えてくれる。視界の全くきかない山頂に次々到着したメンバー全員で写真を撮り、そそくさと下山にかかった。左手からの登山道分岐で雨に打たれながら昼食弁当を食べ、その後はしゃくなげ平からの長い下り道を転ばないように注意しながらひたすら歩きつづける。登山口から今日の宿泊地、あわら温泉「グランディア芳泉」にバスで移動した。

翌日は天気も回復。昨年の英彦山に続いて今年も悪天候の山歩きであった。野坂岳は雨にあわなかったそうである。

11月例会山行「道宗道(どうしゅうみち)小倉山~たいらスキー場」

平成24年11月22日(木)

メンバー:永山義春、金尾誠一、本郷潤一、渋谷 茂、菅田静子

平成24年最後の例会山行は、「五箇山の道宗道」。今回は全長約30kmの一部、菅沼合掌集落対岸の登山口から小倉山を越え、たいらスキー場まで約6kmを歩いた。

登りはじめから一気の急傾斜で、また山頂近くからは 10~20cm の積雪があり思いの他ハードな歩行であった。しかしピークでは五箇山の山々の展望が望め、以前歩いた山や谷の思い出に話が弾んだ。また、嬉しいことには道すがら見事な"なめこ"がたびたび現れたので、喜んで貴重な山の恵みを頂いた。晩秋の穏やかな一日、しみじみと山に入る喜びを感じた山行であった。

ここ数年、富山支部の例会山行として道宗道が選ばれている(過去の山行:平成20.2.9-10五箇山トンネ



小倉山山頂

ル~高落場山、平成21.3.20たいらスキー場~高落場山、 平成22.3.20-21 五箇山トンネル~井波瑞泉寺)。いつも 感じるのは、この道を歩き通した道宗の信仰心の強さで ある。いつか私も全コース踏査を一気に歩き通したいも のと思っている。

【コースタイム】6:45 木戸自工集合(永山、金尾、菅田) ~8:00 たいらスキー場集合(本郷、渋谷)~8:35 行徳寺~8:50 小倉山登山口~10:20 水場~11:15 小倉山~11:50 猪越分岐~12:20 宮谷の頭~12:35 林道~13:35 宮谷登山口~14:00 たいらスキー場~15:25 木戸自工

(金尾誠一 記)

第2回支部長会議、年次晩餐会に出席して

支部長会議

- 12月1日(土) 10時半~ 品川プリンスホテル (晩餐会会場の1室)
- 1.尾上会長あいさつ
- ・会員数 5,200 名、平均年齢 67 歳と、この 3 年間変わらず→会員減に歯止めかかった!
- ・若い会員対策→ユースクラブに2年間1,000万円、いいプランなら支部活動にも助成
- 2.会務報告
- ①秩父宮記念山岳賞 小泉 弘氏:36年間で山岳図書の装丁が500冊超、『装丁山昧』を出版
- ②財務報告 収入では公益法人化後寄付金が増大、121名の新入会員があり入会金収入も増。山研収入はこの5年間で最大。支出は前期並みだ。
- ③組織の改善 10月に公益法人運営委員会、デジタルメディア委員会が発足
- ④山の日制定 PT 10/3 ネットワーク東京会議 95 人

11/25 第2回山岳フォーラム 松本市、1,500人

- ⑤支部活性化 PT 山岳事故の法的責任、山岳保険についてつめる。旅行業法との関係は現状で問題なし
- ⑥ユースクラブ アンケートではクライミング半分・一般の山登り半分の希望。 来年は地方の山にも連れて行きたいので支部の協力を
- 3.支部よりの問題点等について(高原常務理事)
- ・各支部共通なのは①高齢化、②参加者の固定化、③人数減少の3つ
- ・アクションにより少しづつ改善されている(支部から事例紹介)①登山教室(広島)、②森づくり(東海)、
- ③山行形式の多様化に対応 (関西)

- 4.全国支部懇談会について
- ・来年度の計画(静岡支部)10/20(日)~21(月) 静岡駅近くのホテル、山行は検討中

年次晚餐会

富山支部から飯田、近藤、本郷、菊崎、金尾、山田の6会員が参加。晩餐会に先立ち恒例の記念講演、グッヅ販売、支部の図書販売などが行われた。なお今年は図書交換会が初めて晩餐会会場で開催され、並べられた430冊の抽選が2時半からスタート。倍率が高く、なかなか希望の本は手に入らなかったが、地方支部の会員には経験できない機会だった。当日会場を取仕切った三好まき子図書委員長(富山支部会員)が晩餐会会場に顔を出せなかったのは残念だった。(詳細は「山」12月号の記事を参照)。

記念山行

翌日の記念山行は静岡県の愛鷹連峰・越前岳 1,504m へ。 総勢 115 名で富山支部からは本郷、菊崎の 2名が参加。 詳細は日本山岳会 HP参照。

(富山支部長 山田信明 記)





広島支部創立 15 周年記念式典

月日 11月3日(祝)

場所 ホテル JAL シティ広島

参加 金尾誠一

創立 15 年にして自前の支部ルーム開設という熱気とパワーにあふれた広島支部の創立記念式典に出席してきました。事務局会議などで広島支部の方のリーダーシップには畏敬の念を抱いていたのであったが、支部発足以来の経緯、ご苦労をお聞きしてさらにその念を強くした。特に支部ルームへの思いは発足以来のものであったということが心に残った。また、地元新聞社からの登山講座の依頼をきっかけに、支部の基盤づくりとルーム開設にまで結びつけられたことは大変参考になった。

また、毎回立派な支部報を送っていただいているが、これにも 10 年間滞りなく発刊をつづけられた方がおられたことを初めてお聞きして感銘した。それ以外でも各々の立場で熱心に活動されている方々が多くいることが良く伝わってきた。式典の後、ルームにお邪魔して中を見せていただき、また各支部の皆さんとも交流でき良い機会であった。

(追記) 広島訪問の機会を利用して、以下かねて念願の個所も廻った。

玉島圓通寺(良寛修業の地)、「小泉八雲記念館」、石見銀山遺跡、津和野、松陰神社、金子みすず記念館、 広島原爆ドーム、頼山陽史跡資料館(スズキジムニー走行距離 1,987 km) (金尾 誠一 記)







広島支部ルーム

岐阜支部創立 40 周年記念式典と正道院「播隆上人開山忌」

日時・場所 11月17日(土)記念式典・記念講演・祝賀会、「十八楼」

18日(日)記念山行「金華山」、正道院播隆上人開山忌

参加者 山田信明、金尾誠一、本郷潤一、川口 宗(福井支部)

最近、播隆上人ゆかりの地を訪ねて岐阜方面に出掛けることが多くなっている。通い慣れた道となった東海北陸自動車道を南下し、長良川河畔の会場「十八楼」にはお昼前に到着した。福井支部の川口さん(滑川在住)も同乗して行かれた。

午後から記念式典の開式。続く記念山岳講演では、穂刈康治氏(槍ケ岳山荘、信濃支部会員)がスライド映像を交えて山荘の歴史を紹介された。また、記念演奏のリピート山中氏はユーモアあふれる歌詞の自作の歌をギター演奏で披露された。軽妙な会話とあいまって会場は暖かな笑いに包まれた。祝賀会も賑やかに進行し、地元の郡上踊りで会場は大いに盛り上がった。岐阜支部の皆さんの周到な準備と行き届いた運営で、盛大かつ心地良い式典であった。

翌日の記念登山の「金華山」には、後の予定があり、金尾、川口の2人は少し早めに自由行動させてもらった。「馬の背登山道」を1時間程登り岐阜城に到着すると、そこには多くの人たちが集っておられた。地元の方にお聞きすると、コースが多彩で自由がきき、植生も豊かで飽きがこないので大切な山とのことであった。ヤマガラがすぐ目の前にまで寄ってきたのに驚かされた。

下山後、播隆山正道院での「播隆上人開山忌」に参加させて頂いた。正道院は播隆上人に深く帰依された 御鋳物師の岡本太右衛門氏によって建立された寺院である。富山支部としても前年の開山忌に続く訪問とな





った。法要読経の後、竹中住職と黒野こうき氏の話があり、40名程の熱心な方々と同席しての参拝であった(山田、本郷は記念登山に参加後、途中から開山忌に合流)。お斎をいただき感謝してお別れした。年々、正道院住職や黒野氏のような播隆上人を慕う方々と結びつきが強くなってきている。上人顕彰にとって心強い方々である。 (金尾誠一 記)

12月例会「講話と忘年会」

日時 平成 24 年 12 月 5 日 (水) 17 時より

場所 富山ステーションフロント Cic3 階 とやま市民交流学習館 5 号室

出席者 木戸繁良、石浦邦夫、高塚武由、山田信明、有沢辰彦、近藤晋、松本睦男、川田邦夫、辻 斉、 金尾誠一、河村靖晴、佐藤武彦、山岸和子、本郷潤一、道正政信、渋谷茂、伊東保男、

河合義則、菅田静子 (講話のみ)飯田肇、森修作、平田信康、本多秀雄夫妻 以上24名

12 月恒例の例会講話は、佐藤武彦会員によって「立山信仰の源流と現代」と題して行われた。先ず、日本山岳修験学会の山本義孝氏との調査山行について紹介された。

その内容は、立山における山岳登拝拠点の可能性が高い地点群が確認されたこと、立山と熊野の修験との 関連性についても検討する必要があることなどであった。

次に、各地点の礼拝所を結んだのが立山巡拝道であり、その試練の場として山中六禅定(①橋禅定、②鎖禅定、③地獄禅定、④石積禅定、⑤極楽禅定、⑥走り禅定)があること、また近年行われている現代の元服登拝の経緯などが語られた。

最後に、ラムサール条約に登録された弥陀ヶ原・大日平について次の提言があった。

- ・弥陀ヶ原は今注目の地域であり入客者も増えてきているが、湿地であり大人数で歩くべき場所でないこと。
- ・バス道路沿いに湿地を眺められる展望台が必要なこと。
- ・自然に負荷をかけないためには積雪期が推奨されること。

佐藤会員は長く立山の自然に関わってきておられ、その豊富な経験と幅広い知識、柔軟な発想などに基づいた話は大変参考になることが多かった。また初めて聞くエピソードも数多くあり興味深く聞かせていただいた。





この後、忘年会は「松や」富山エクセル東急店に会場を移して行われた。この一年のお互いの無事と山行を振り返り、また翌年の山行に思いを馳せながら語り合う無上の時であった。 (金尾誠一 記)

飯田会員、立山の氷河研究で北日本新聞文化賞特別賞を受賞

(北日本新聞 2012年10月19日より転写)

☆ 立山連峰の三つの氷 るとの調査結果をまとめ、日 るとの調査結果をまとめ、日 本雪氷学会の認定を受けた。 立山の観光への効果が期待されている。 3以)の御前沢雪渓、剱岳(2 アの氷河の999以)近くの三ノ窓、小窓 シアのカワックの水河であると、日本雪 研究者も、大学会(東京)に認定された。 飯田、水学会(東京)に認定された。 近常などの後に対している。

この発見により、極東アジシアの水河形成地の南限が、ロシアのカムチャツカ半島から一気に立山まで南下。海外の研究者も関心を寄せる。飯田、福井両氏は「調査の道筋をつけてくれた先人やガイド、山小屋関係者に感謝している」と口をそろえる。今後は別の雪渓も調査し、立山後は別の雪渓も調査し、立山であり、極東アジ

国 神物館学芸課館 飯田 肇氏 (57) 同学芸員 福井幸太郎氏 (39) イカ の 水河発

一ついて解説する福井氏(右)と飯田氏 国内初と認められた御前沢の氷河(奥)に

親睦会便り

1月25日立山国際ホテルで日本山岳会富山支部親睦会の総会が開催され、会員14名の出席を得て平成24年度の事業報告、会計報告などが承認されました。引き続いて準会員3名を加え懇親会が行われました。翌日の大品山登山は吹雪が激しかったので中止となりました。

<親睦会内規について>

この親睦会は支部会員のうち希望者で構成し、主に会員相互の慶弔に関する事業とその他、親睦を図るのが目的です。登録料は 20,000 円とし、原則として返還しません。支部を退会した会員にも本事業が適用されます。

未加入の会員の皆さんのご入会をお待ちしております。

(代表幹事 近藤 晋)

(編集後記)

支部長の年頭のご挨拶の中にもありましたが、今年度は支部の行事、山行が多く企画されます。会員の皆さんが、少しの時間を見つけて行事に参加し、会報に記事を投稿されることを期待しています。

会報委員会も皆様からの原稿の意図を 尊重して検討し、載せています。(川田)

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第92号

発行者:山田信明 編集者:川田邦夫

事務局 〒931-8451 富山市銀嶺町 10-16 金尾誠一方

電話 076-438-2716 , 090-2036-5853

E メール <u>s-kanao@pf.ctt.ne.jp</u>